

編集後記

今年度は、「想定外」の大地震と大津波による東日本大震災と東京電力福島原子力発電所爆発事故という、未曾有の災害に見舞われた。そして、沈着な庶民の行動に全世界から賞賛が寄せられ、国の経済力に関係なく多くの国から支援金が送られてきた。また、震災直後の自衛隊の規律ある救援行動や企業による破壊されたサプライチェーンの迅速な復旧活動にも世界の耳目を集めたともいわれている。

一方、政府・東電の処置には迅速さに欠け、また不適切なものが多々あったといわざるを得ない状況で、全世界に失笑を招いただけでなく、国民にもわが国の科学技術への信頼を失わせ、原発の新たな稼働を困難にしている。

事実、原発事故の報道に当たって、政府であれ、東電であれ、あるいはマスコミに登場した大学教授であれ、本当に原発プラント自体をよく理解していないのではないかと思わせるような談話が多かった。極端ことをいえば「想定外」を繰り返すのみで、予防措置を取らなかった、むしろ取れなかったといわざるを得ないような状況であった。

「知」という観点からいうと、このような時にマスコミに登場する多くの知が書齋的・研究室的な上に局所的で、問題の本質を見抜けないばかりでなく、しかも「知識」(Knowledge)を実行する「知」、つまり「知恵」(Wisdom)あるいは「知性」(Intelligence)にも欠けているように思われる。すなわち、別の観点から言い直すと、研究者としての科学者、言われた通りにモノを作る技術者はいても、モノを創れるエンジニアつまりエンジニアリングが不在だったといえ言わざるを得ない。たとえ、大津波だったとはいえ、水が被るのを期待していたかのような場所に配電盤を配備し、非常用電源を稼働できなかったというのは、まさにそのことを象徴しているように思われる。

さらに、いうならば、如何に一人ひとりの個人が沢山の知識を持っていても、課題を見出し、その本質を見極め、関連する知識を組織化しつつ、総括的な解決策を創造して、社会に貢献する場がなければ、一今やその場は情報通信技術によって提供されつつある—その知を生かせないのではなからうか。最近、米国の著名な CIA (Central Information Agency) に倣って、ビジネス界では競争インテリジェンス (CI, Competitive Intelligence) が、あるいはビジネスインテリジェンス (BI, Business Intelligence) が話題にされるようになってきたが、従来のように知識の世界の中でのみ、留ってしまうおそれはないのであろうか。この「総合知」もその轍を踏まないように務めてかなければならない。

2012/01/15

小松昭英 記

追記 2010年度の学会誌は発刊されなかった。

